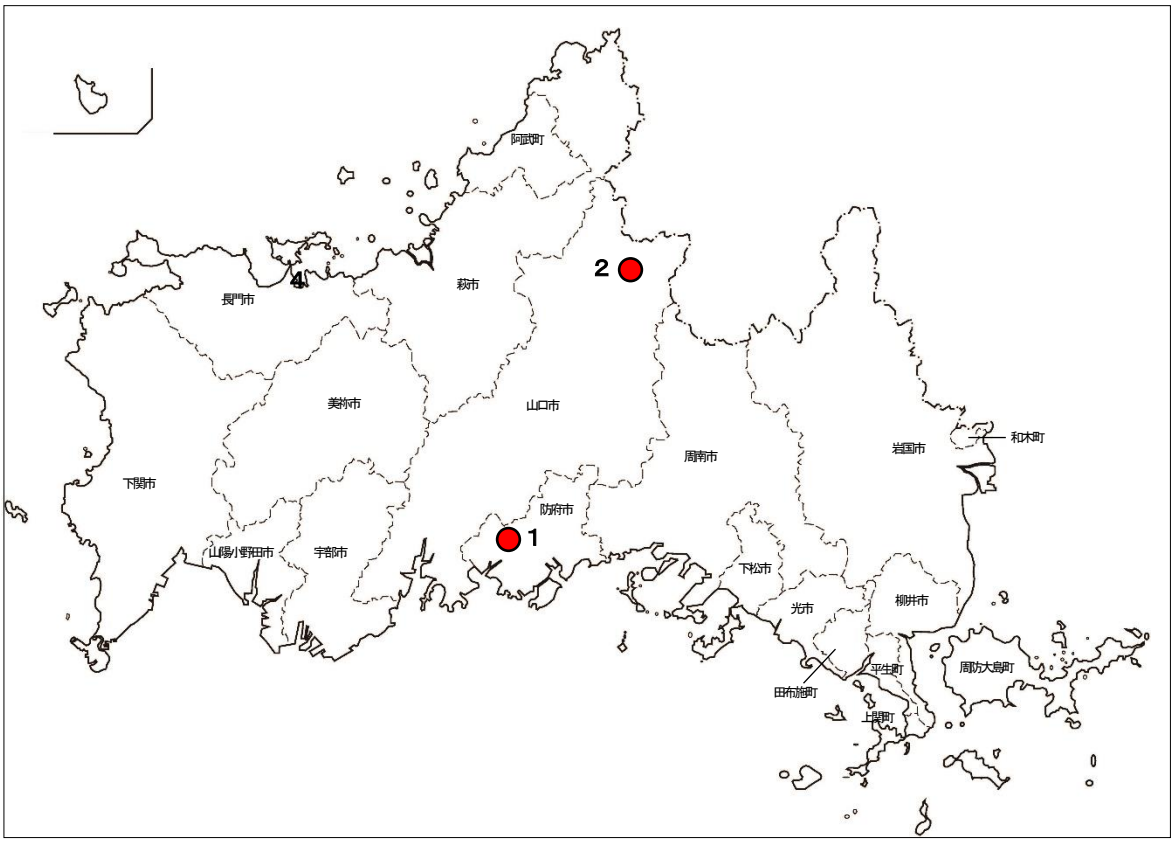
山口県埋蔵文化財センター第 54 回展示

掘っちょる山口

― 掘り出された歴史と文化 ―

笛給西寺遺跡（防府市）発掘調査のようす

発掘調査の成果等



遺跡の場所

1　笛給西寺遺跡（防府市）　2　宮ヶ久保遺跡（山口市）

展示遺跡年表

中心時期　　その他確認された時期

時代	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	鎌倉	室町	安土桃山	江戸	明治
遺跡の時代	笛給西寺遺跡										
	宮ヶ久保遺跡（特集展示）										
おもなできごと	・狩りをしてくらす	・狩猟・漁労・採集を行うムラができる ・縄文土器や石器・弓矢が使われる	・大陸から日本列島に稲作・金属器が伝わる ・卑弥呼が邪馬台国を治める（『魏志』） ・各地にクニがつくられる（『漢書』） ・集落が営まれる（宮ヶ久保遺跡）	・古墳が造られ始める ・ヤマト政権による国土の統一が進む	・七五二　東大寺の大仏ができる ・七一〇　平城京に都を定める	・七九四　平安京に都を移す ・一一六七　平清盛が政治の実権をにぎる ・集落が営まれる（笛給西寺遺跡）	・一一八五　鎌倉幕府が成立する	・一三三八　足利尊氏が京都に幕府を開く ・一四六七　応仁の乱が起こる	・一五九〇　豊臣秀吉が全国を統一する	・一六〇三　徳川家康が江戸に幕府を開く ・一六三七　長州藩銭座が設置される	・一八六八　明治維新　江戸を東京とする

北側上空から見た遺跡のようす

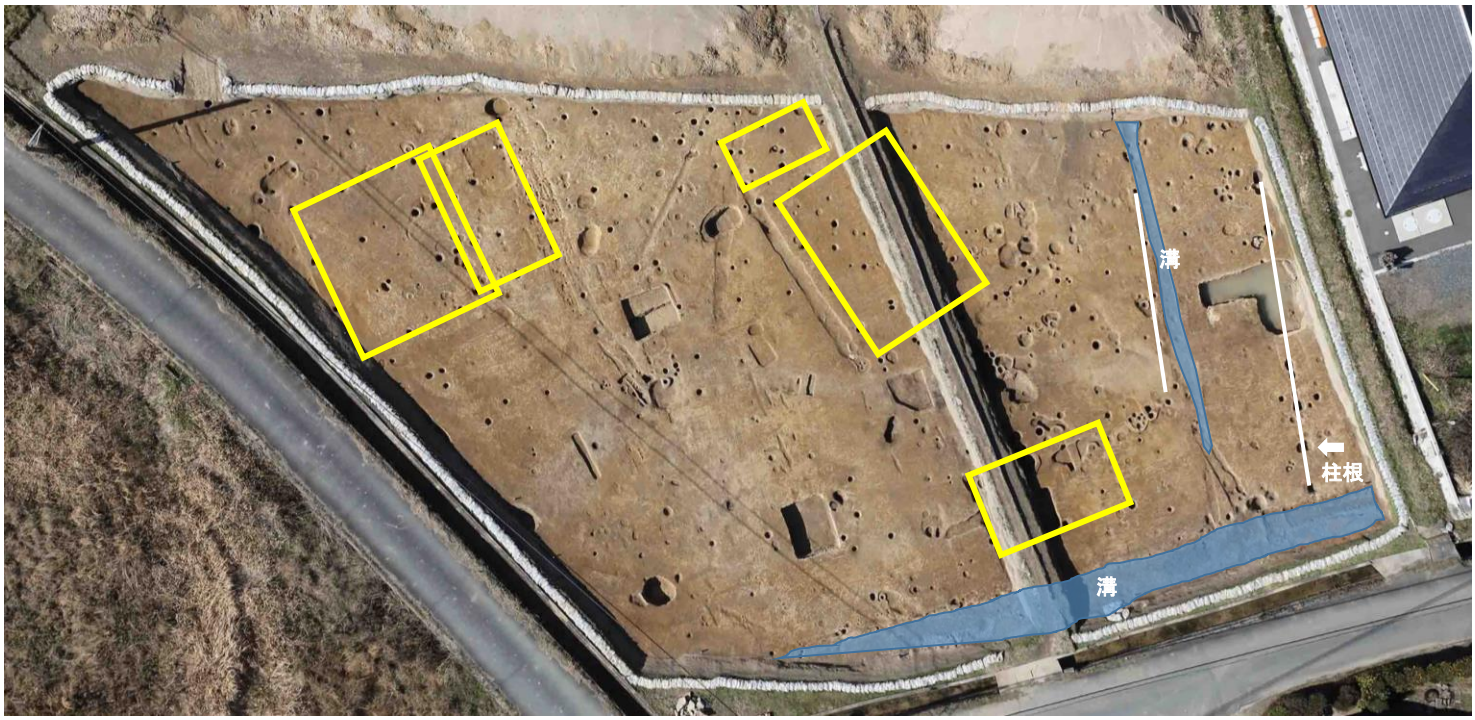
作業風景

笛給西寺遺跡（ふえきゅうにしでらいせき）　（防府市）

笛給西寺遺跡は、防府市大崎にある平安時代後期から鎌倉時代を中心とする集落跡です。西側の山から佐波川方面に流れる小河川の間にある微高地に遺構があり、１～４区に分けて調査を行いました。

３区では、５棟の掘立柱建物や、現在の用水路に並行する溝、溝を伴う２条の柵列などを発見しました。この溝からは、多量の土師器、須恵器、瓦質土器とともに高価な輸入磁器も多く出土しました。このことから、このあたりにあったのは庶民の集落ではなく、有力者の屋敷、または寺院があったことが考えられます。

１区から４区には、奈良時代後半から平安時代初めの遺構もありました。１区の溝からは国府で出土するような須恵器の三足壺の獣脚が出土しました。



３区全景（黄色の四角は掘立柱建物・白い線は柵列）

遺物の出土状況（左：白磁皿　右：土師器杯）

柱根

出土遺物

〔特集展示〕

発見から50年　宮ヶ久保（みやがくぼ）遺跡展

山口県埋蔵文化財センターは、約50年前から現在に至るまでの発掘調査で発見された多くの出土品を所蔵しています。そして、これらは発見当時はもちろん、現在・未来においても山口県の歴史解明に資する貴重な品々です。

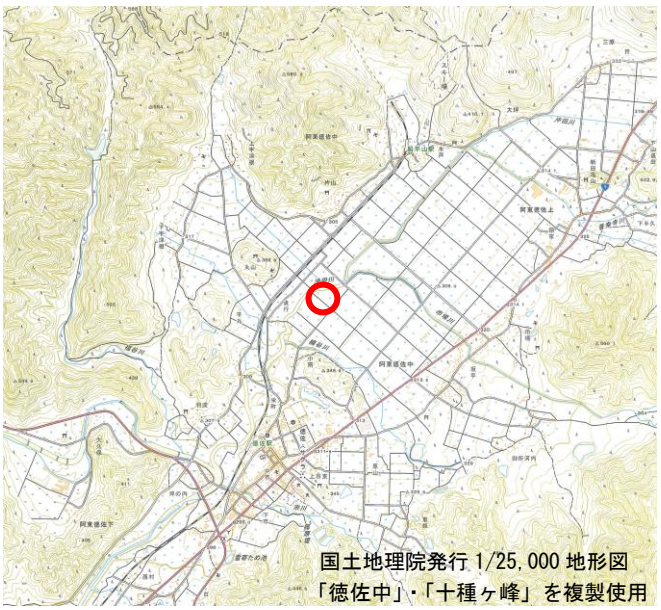
本特集展示では、発見から50年を迎えた宮ヶ久保遺跡の出土品をご紹介します。多量に出土した木器が注目されますが、この遺跡は山口県を代表する弥生時代後半期の集落遺跡でもあります。今回は、これまで展示されたことのない土器・石器などから、この遺跡を読み解いていきます。

遺跡の発見と調査

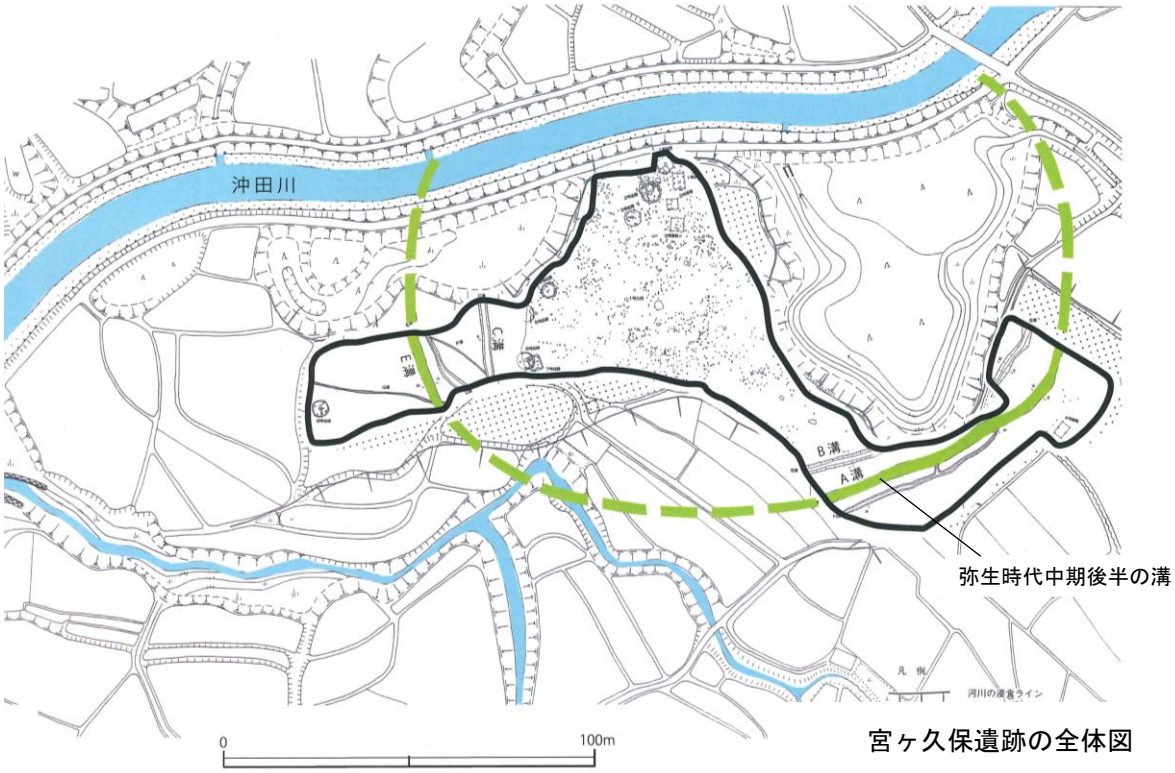
宮ヶ久保遺跡は、山口市阿東徳佐中字宮ヶ久保にあります。この地点は徳佐盆地のほぼ中央で、耕作の際に土器や石器が出土することが知られていました。

そして、今から50年前の1975年（昭和50年）、農地整備に伴う事前調査で弥生時代を中心とする集落遺跡が9,000㎡にわたって広がることが確認されました。翌年には遺跡全域を対象として発掘調査が行われ、土器や石器に加え、多種・多量の木製品が発見されました。

この遺跡は弥生文化の内陸部への広がり方を考える上でも重要で、集落の全体が調査されたことや、土器によって地域間交流の様相を明らかにできることなど、多くの注目すべき点があります。



宮ヶ久保遺跡の位置



宮ヶ久保遺跡の全体図

溝に囲まれたムラ

宮ヶ久保遺跡では、弥生時代の中ごろ（今から約2,200年前）に人々が暮らし始めました。竪穴住居や高床倉庫を溝で囲む、環濠集落（かんごうしゅうらく）とよばれるムラで、一度溝を掘り直してムラを拡大しています。遺跡は沖田川とその支流によって大きく削られていますが、ムラは最大で東西160m、南北110mの規模だったようです。

人々は徳佐盆地でコメ作りをしながら生活していましたが、弥生時代後期の初め（今から約2,000年前）に一度ムラから人々が去り、約100年後に再び住み始めたことがわかっています。天候不順や自然災害など、生活条件が悪化した時期があったのでしょうか。

ムラを囲む溝

竪穴住居

弥生土器

九州系の土器

宮ヶ久保遺跡で見つかる土器は弥生時代の中ごろ（今から約2,200～2,000年前）のものが最も多く、この時期にムラが栄えたことがわかります。

この時期には、装飾の少ない在地の土器に加え、表面を赤く塗るなどした九州系の土器が見られます。遺跡は内陸部にありますが、九州とつながりを持つ人が住んでいた可能性があります。徳佐盆地は現在国道９号やＪＲ山口線が走ることからわかるように、瀬戸内海沿岸と日本海沿岸をつなぐ交通路に沿っています。この交通路は人が移動するだけでなく、生活に必要な物資や情報が行き交っていたと考えられます。

九州系の土器

祈りの土器

宮ヶ久保遺跡から発見された土器で特徴的なものは、小型の壺・甕・鉢です。高さ10～15cmの土器で、実用品ではなく、まつりで神に祈る時に使われたと考えられます。弥生時代後期以降に多く見られる、粗いつくりの「ミニチュア土器」につながるものですが、比較的丁寧（ていねい）に作られています。

小型の土器が出土する溝からは、まつりの道具と見られる木製品も見つかることから、当時の人々は折に触れて神に祈る生活をしていたと考えられます。災害や病気のない暮らしや、冷涼な土地での、まだ不安定な水田の豊作などを祈ったのでしょうか。

小型の土器（壺・甕・鉢）

山陰（さんいん）系の土器

弥生時代中期に栄えた宮ヶ久保遺跡のムラは一度衰退（すいたい）し、後期後半に生活が再開します。その際、使われる土器は山陰系のものが多くなっています。

山陰系の土器は出雲地域を中心に、島根県・鳥取県に分布しています。口縁端部（こうえんたんぶ）を立ち上がらせたもの（複合（ふくごう）口縁（こうえん））が基本で、台付の壺・鉢、鼓形器台（つづみがたきだい）など特徴的な器形が見られます。そして、宮ヶ久保遺跡は山口県で山陰系土器が最も多く出土した遺跡となっています。隣接する島根県西部地域から人々が宮ヶ久保遺跡にやって来たと考えられますが、その理由ははっきりしません。

山陰系の土器

石の道具

宮ヶ久保遺跡からは、石の道具も多く見つかっています。木を伐る石斧、伐った木を加工する片刃石斧、稲を刈る石包丁、狩りに使う石鏃、糸を紡ぐ紡錘車、刃物を研ぐ砥石など、様々な用途の石の道具が使われました。

道具の種類によって、それに適した石材が異なるため、地元で調達できない場合には、遠方から原石や製品を取り寄せていました。生活に必要な道具をそろえるためには、交易ネットワークの維持が不可欠だったと考えられます。新潟県糸魚川周辺からはるばる運ばれて来た、ヒスイ製の勾玉も見つかっています。

石器類

鉄の道具

宮ヶ久保遺跡からは、鉄の道具は見つかっていません。しかし、薄く加工された木の容器や、なめらかに削られた動物彫刻は石の道具では作れません。砥石が多く見つかっていることからも、弥生時代中期には鉄の刃物が身近にあったと見てよいでしょう。こうした鉄の道具は、北部九州で作られたものを、交易によって手に入れていたと考えられます。ただし、伐採用の斧は石のものを使っていますので、鉄器の使用は小型品に限られていたようです。

鉄の道具は錆びてなくなる場合もありますが、貴重品であり、こわれても再加工ができるため、弥生時代からリサイクルが基本だったと考えられています。

なめらかに削られた動物彫刻

木の道具

宮ヶ久保遺跡を有名にしたのは、多種・多量の木の道具です。弥生時代中期の溝から、農具（鍬など）、工具（斧の柄など）、狩猟具（弓）、容器（鉢）、紡織具（紡錘・布送具）、建材（梯子など）、まつりの道具などがみつかりました。溝の底に約2000年間、水浸けの状態で保存されていたもので、全国的にも貴重な発見でした。

木製品は武器形・銅鐸形の道具や動物彫刻が注目されますが、衣・食・住にかかわる当時の日用品がそろっている点が重要です。

溝の底から見つかった木製品

山口県埋蔵文化財センター　利用案内

- 開館時間　午前８時 30 分～午後５時
- 休 館 日　土・日曜日、国民の祝日、年末・年始
- 入 館 料　無料

編集・発行　公益財団法人山口県ひとづくり財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073　山口市春日町3番22号
TEL:083-923-1060 FAX:083-923-2001
URL:https://www.y-maibun.jp/